

23 『脈経』における版本の比較

—『脈経』版本字句異同調査報告

中川 俊之

I 『脈経』の中国医学における位置と問題点

(1) 『脈経』は中国の晋代、今からおよそ一七〇〇年前に、『傷寒雜病論』の校訂者でもある王叔和により編纂されたとされる医書である。『脈経』は、『素問』『靈枢』『難経』『傷寒論』『金匱要略』といった中国医学の原典とされる医書をはじめ、当時伝存した医書を広く引用して編纂されており、当時の脈学の様相を伝える医書である。後代中国医書にも頻繁に引用され、中国医学の脈学を決定付けた医書である。

(2) 『脈経』は編纂方法や、後代医書への多数引用等から、原典や後代医書の校勘に重要な位置を占めている。『素問』『靈枢』『難経』『傷寒論』『金匱要略』は北宋の医書校勘刊行（宋改）を経ているが、特に『傷寒

論』『金匱要略』は宋改時に、『脈経』を主に校勘されている。

(3) 『脈経』は上記の様相から、中国医学を学ぶ上で必読の医学書であるが、字句には版本間の異同が多く、『脈経』を読む時の問題になっている。

II 『脈経』の諸版本

(1) 『脈経』は成立後から北宋に至るまでに伝写による異本を生じた為、北宋代に校刊された。現存する『脈経』の諸テキストは全て、この宋改を経たものである。宋改前の旧態に関しては、現行本『脈経』以外に、隋唐期医書（『脈訣』『諸病源候論』『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』『太平聖惠方』）等に引かれる条文から察するしかない。

(2) 宋改後の初刊本は一〇六八年刊行の大字本である。続いて一〇六九年には一般向けに小字本が刊行されている（国字監・小字本）。この校正本に基づいて、建陽本、広西漕司本、何大任本が刊行された。これらの版本は全て現存しない。現行本『脈経』はこのうち、広西漕司本か何大任本のいずれかに属する。

(3) 何大任本系とは一二一七年刊行の何大任本に基づくもので、この版本は存在しないが、明にこれを覆刻した仿宋何大任本が数部存在する。このうち、陸心源旧蔵本で、『東洋医学善本叢書』(東洋医学研究会、一九八一)の底本である静嘉堂文庫所蔵本が、現在最善本とされる。

(4) 広西漕司本系とは、建陽本に基づいた宋版広西漕司本の系統に属する版本である。龍興儒学本、畢玉本、袁表本、沈際飛本、光緒京師医局本、日本の慶長古活字本、慶安和刻本、元禄重刊本が有る。

III 報告内容

今回発表では、現在最善本とされる仿宋何大任本を中心に、上記諸版本の字句の異同を明らかにする。

(日本鐵灸研究会)

